

「再生陶磁器」の経済波及効果

加藤 秀弥

はじめに

筆者の生まれ育ちは岐阜県土岐市である。大学は愛知県瀬戸市に車で通っていた。どちらも陶磁器産業の盛んな土地柄のため、自然と陶磁器は身近なものであった。近年陶磁器を取り巻く環境が大きく変わったことを耳にし、修士論文として陶磁器のリサイクルに着目し経済効果を推計した。今回は、この修士論文の内容を紹介したい。

再生陶磁器について

近年、多くの製造業でリサイクル技術が確立されてきている。陶磁器も例外ではない。陶磁器のリサイクルについては、天然の陶土にリサイクル原料を含有させて焼き上げた「再生陶磁器」という製品が開発された。陶磁器産業は、高度経済成長期に、その原料である陶土採掘が過剰に行われた結果、現在では原料不足の危機に直面している。

しかし、再生陶磁器の普及は芳しくない。再生陶磁器を利用する経済的な

メリットが不明瞭のため製造業者が手を出しづらい現状にある。

産地で異なる再生陶磁器の特徴

再生陶磁器が製造される主な地域は、岐阜県東濃地区と愛知県瀬戸市が挙げられよう。

東濃地区の再生陶磁器開発の特徴として、その体制であろう。不用食器の収集と運搬、資源化のための粉砕、



瀬戸市の「グランドキャニオン」の上空図。広範囲に渡って赤山となっていることがわかる。出典)国土地理院

粉砕物を土に仕立てる製土、再生された土を用いて再生陶磁器を作る製陶、再生陶磁器を流通させる卸売りなど、陶磁器を資源循環させるための一連の工程を、地区内に立地する企業の組合が務めている。

瀬戸の再生陶磁器の最大の特徴は、リサイクル原料の高配合率である。この配合率が高くなるほど天然の陶土資源の利用料が少なくなるため、地球に優しい。また本来であれば最終処分場にて処分される陶磁器を回収しリサイクルしているため、ごみの減量にも繋がる。瀬戸市では、配合率五割という高水準を設定し、いち早く技術化に成功している。

以上の様に、それぞれの地域での特色は大きく異なる。しかし共通する事項として、先に挙げた理由による普及率の低さが課題となっている。

経済波及効果について

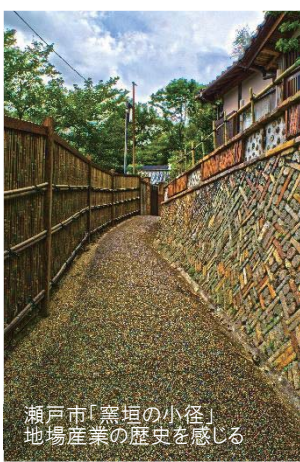
以上のように、製造技術は確立されるものの、経済的な見通しの悪さから再生陶磁器の普及は万全ではない。そこで、再生陶磁器の普及が与える地域への影響を、「地域産業連関分析」により推計した。地域産業連関分析とは、財・サービスの流れをモデル化することで経済波及効果を推計する分析方法である。

産業連関分析は産業連関表と呼ばれる、ある地域における一年間の財・サービスの流れを表した表を用いてモデル化される。この表は国、都道府県、政令指定都市レベルでは公表されるが、小地域ではデータ制約上作成が困難なため公表されていないので東濃地区や瀬戸市を対象とした表を別途作成する必要がある。今回は、地域間の物流を既存統計から推計して表の作成と分析モデルの構築をした。

結果として、再生陶磁器の技術を有する地域への経済効果は大きいことが判明した。再生陶磁器の産地が、瀬戸市や東濃に限られるため、同地区への陶磁器需要が集中することにより生じる正の効果であると考えられる。

おわりに

地域の課題を解決する一方策として経済分析は有効だと思ふ。今後も多くの地域の課題解決に携わっていく所存であるが、経済分析が必要な時には大いに活躍していきたい。



瀬戸市「窯垣の小径」地場産業の歴史を感じる